

あぱっさ

マウ語の
地の精霊
vol.20

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL:03-5481-1912 FAX:03-5481-1913
xingu@rainforestjap.com www.rainforestjap.com

HOW TO HELP

<年会費>大人:¥5,000 18歳未満:¥3,000

・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体
*通信欄に「会費」または「寄付」とご明記ください。

・三井住友銀行 東京中央支店
(普)7066247 熱帯森林保護団体

*銀行からのお振込の方は、
お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせ下さい。

31回目のアマゾン視察を終えて

南 研子

8月初めに無事アマゾンより帰還しました。今回も結果的に実り多き視察でしたが、1992年 最初にシングー地域を訪れた時から比べると当然ですが大きく状況は変わりました。それはこの星が現在抱えている様々な問題の縮図の顕現化とも言えます。シングー地域のイアラピチ族の学校はシングーで唯一インターネットも繋がりと、PCを使いこなせる次世代もいます。それが悪い事と私は思いません。ブラジルの白人社会を理解、認識し過った選択を回避することにもつながります。集落内は脈々と続く伝統文化を継承し、毎朝女性たちは畑にマンジョウカ芋を収穫し面倒くさい昔ながらの行程を黙々とこなし、家族に主食の芋を焼き、工芸品を作り、子どもの世話をし隣り近所が助け合い、おおいに笑い自然の法則に逆らうことなく日々暮らしていますが、本来は自給自足で賄える環境も様々な要因で脅かされています。文明社会のシステムを受け入れざるを得ない貨幣制度は、既にインディオの集落にも入りつつあり憂いますが、どっぷり貨幣制度の弊害や恩恵を受けている文明社会に生きる一人として、そのことを批判することは出来ませんし、貨幣制度が確立していない世界を残すには資金が必要だということも事実です。太古からの自然は猛スピードで破壊されていますが、それに立ち向かうカヤボ族の若者がいます。8月末は乾期の終わりに差し掛かり異常な乾燥で火災が多発するでしょう。

昨年はシングー地域の18%が火災にあいましたが、カヤボ族の「消防団事業」を実施しているカポトジャリーナ地域は大事には至りませんでした。本当に砂漠に水を蒔くような行為かもしれませんが、諦めずに続けるエネルギーこそが大事だと思います。アマゾンから一番遠い日本の支援でささやかではありますが、森を火から守る支援事業にラオーニをはじめとするインディオリーダーや若者たちは「つながり」を心の支えにして感謝の気持ちを行動で示し、森を残す使命に日々精進しています。近い将来の経済的自立を促進する「養蜂事業」とジャングルを火から守る「消防団事業」の2本をここ数年継続して支援していこうと強く心に決めました。



カマユラ族の偉大なる族長、故タクマのお姉さん(推定年齢95歳)と南研子

シングー川の夕やけ



シングーイアラピチ族の集落

世界でも類のない、シングー、カラパロ族の蜂蜜



今年も遠いジャングルから、貴重な蜂蜜を背負ってきました！ぜひお試しください！



- お名前・ご住所・電話番号・ご注文数
をご記入の上、以下の連絡先へお申し込みください。
- 売り切れ次第、販売を終了いたします。

メール: xingu@rainforestjap.com
FAX: 03-5481-1913

ご報告

■サンパウロ在住の日系企業主婦たちのグループ「ブラジルを知る会」会長の清水裕美さんは当団体を多岐に渡り応援して下さいます。このグループの記念すべき「20周年特別講演会」でアマゾンからのメッセージを下郷さとみさんと共に7月28日サンパウロにおいて講演しました。

■今回2週間だけTBSテレビのクルーがイアラピチ族の生活を撮影するために責任者として同行しました。8月14日放送「人間とは何だ！」の番組で一部紹介されました。



撮影現場のイアラピチ族の集落



TBSテレビのクルーの面々、下郷、南、インディオ達

ありがとうございました

vol.19の「あぱっさ」で当団体の運営継続危機をお伝えし、資金のお助けをお願い致しましたところ、沢山の方々から激励のお言葉とご支援金を送って頂き、当団体の運営を続けていけることになりました。本当に本当にありがたく元気になりました。アマゾンの自然が残りますように、森の神々、精霊さんたちのご加護を信じ尚一層、支援活動を頑張っ参ります。ありがとうございました。

RFJ×MWのコラボ開始

当団体設立当初から約30年間、Tシャツ、トートバッグ、リトグラフ等でお世話になっているMWアトランティスファクトリー。私たちRFJと苦楽を分かち合ってきた大切な同士とも言える存在です。今回RFJとMWがコラボしてステキな製品を作りました。カヤボ族の精霊さんからのメッセージともいえる図柄ですので、多くの方には是非是非アマゾンの風を感じて頂きたくご購入のほど宜しくお願い致します。

アマゾン 視察報告 2017年6月～7月



今年も南代表とともにアマゾンを訪ねてきました 現地発、ホヤホヤの情報をお届けします！

下郷さとみ（フリージャーナリスト/支援事業コーディネーター）

アマゾン視察の旅は、事業パートナーのブラジル人専門家、そして事業に取り組む先住民の人たちと顔を合わせられる年に一度の貴重な機会です。特に日本とジャングル奥地の村との間で連絡を取り合うのは物理的に困難で、実際に足を運ばなければわからないことが多々あります。現地に足を運んで状況を把握し、次のステップを、彼らと膝を付き合わせて共に構築していくことが求められます。現況の把握は、事業の進捗具合に関してだけではありません。事業の担当者や、彼らの属する先住民コミュニティがいま抱えている課題や問題を、さりげない会話や垣間見せる表情からも真摯に読み取りつつ、今後どのような支援（物的、資金的支援に限らず、心理的支援もまた重要です）が必要かを、時にはその場のとっさの判断も交えながら決定していきます。このような目的を持った現地視察の旅ですが、今年もとても実り多い結果となりました。以下、当団体が現在支援する主なふたつの事業——養蜂事業と消防団事業についてご報告します。

【養蜂事業】 経済的な自立と自主運営へ向けてステップアップが進んでいます！

養蜂事業は、シンガー川の上流域に広がる先住民保護区「シンガー・インディオ公園」の南部地域で、7つの民族（マチブ、カラパロ、イアラピチ、ワウラ、カマユラ、アウェチ、ナフクワ）の計7村で取り組んでいます。これまで養蜂技術専門家のウェメルソンを現地へ年に3回派遣して、主に技術面のサポートを続けてきました。次の目標は、より高度な技術の習得、そして村ごとにはちみつ製品を正規の市販ルートに乗せて経済的な自立をはかり、彼ら自身で事業を主体的に運営していけるようになることです。

ブラジルでは食品の市販には政府の認証マークが必要で、認証の取得には食品衛生法の基準に則った食品加工施設の設置が求められます。認証を得る主体は法人格を持つ団体でなくてはならず、まず各村でコミュニティ組織を設立して政府に法人登録をする必要があります。役所の煩雑な手続きを進めるには、ジャングルの奥地の村から都市部まで何度も出向かなければならず、時間も数ヶ月近く要します。そもそもそれ以前に、組織が立ち上がるには、コミュニティがひとつにまとまっていなくてはなりません。また、文字の読み書きや計算という習慣・文化のなかった彼らが、事業計画や報告書の作成、在庫や資材の管理、会計などの作業をこなせるには、まだまだ困難があります。このような課題をひとつひとつ乗り越えてはじめて、自立のスタートラインに着くことができるのです。

■ブラジルのNGOとも連携してはちみつ市販化へ

いま、7村のうち、まずマチブとカラパロで加工施設の建設計画が具体的に動き始めています。カラパロでは当団体の援助で建設を予定していますが、マチブでは、さらに自立をうながす試みとして、自力での資金調達に挑戦しました。ウェメルソンのサポートのもと、まず法人登録を行い、その法人名でブラジル国内の助成団体に助成金を申請。結果、みごと建設資金を得ることに成功しました。日本からの援助をただ待つのではなく、自身の力で必要な資金を調達し、それを管理・運営していけるようになることは、自立に欠かせない条件です。その意味で、次への大きな一歩を踏み出せたと言えるでしょう。

2村での施設の建設は、次の乾季（4～9月）のはじめに着手の予定です。完成すれば、すぐに認証取得に動き出します。シンガー・インディオ公園の中部～北部地域の一部では、以前から地元のNGO「ATIX」がブラジルの先住民支援NGO「ISA」と共同で養蜂事業を実施しており、はちみつの市販ルートも既に確立されています。そこでは政府認証に加えて有機認証も取得され、農業などは全く無縁のアマゾンの森の花のみつだからこそその魅力が大都市の消費者の人気を呼んでいます。当団体の養蜂事業でも、両NGOと連携して同じ市販ルートに乗せて



写真上から：マチブの養蜂師コニョホ(左)と家族 / ウェメルソン(真ん中)と共に太陽光パネルにつないだパソコンで法人登録の提出書類を確認中 / 巣箱の中は、はちみつがたっぷり(以上マチブ) / 村人たちのミーティング(カラパロ)

いく計画です。今回の旅では、両NGOの担当者をまじえて、マチブ、カラパロ、イアラピチの各村でコミュニティの全体会議を持ち、今後について詳細な打ち合わせを行いました。

先住民の存在がアマゾンの森を大規模開発から守っています。そして現代において先住民が森で暮らし続けるには、森を壊さない持続可能な方法による、森のめぐみを生かした経済手段の創出が不可欠です。養蜂は、その有力な手段として、先住民からも大きく期待されています。

【消防団事業】 本部施設を自力で建設して、ますますパワーアップする消防団

消防団事業は、シンガー・インディオ公園のすぐ北側に接するカポト＝ジャリーナ先住民保護区で、カヤポ族とジュルーナ族の若者が合同で取り組んでいます。シンガー川流域の周辺は大規模な農場・牧場ですっかり開発され尽くして、唯一、保護区だけに深い森が残されている状態です。農閑期となる乾季には土ぼこりを舞い上げながら、周囲から乾いた熱風が保護区の森の中へと吹き込みます。それによって近年、森の乾燥化が進み、乾季に森林火災が多発するようになりました。これを強く懸念するカヤポ族長老たちから要請を受けて緊急発足した当事業でしたが、3年目を迎えて、いよいよ消防団の拠点本部の施設を構築することになりました。

■「森を自分たち自身の力で守りたい！」

7月なかば、保護区内に点在する村々から消防団員15名と見習い団員15名が事業拠点を置くピアラス村に集結して、大工仕事に精を出していました。消防団の本部となる、消防道具の保管小屋や団員の宿泊小屋、台所兼食堂を建設するためです。建物は団員自身が森から木を切り出して柱や板に加工し、伝統家屋の技法で建設します。シロアリの害や雨季の雨漏り、湿気による劣化を防ぐため、建物の一部にブロックやセメント、屋根瓦も活用するくふうなどもこらしています。これらの案も設計も施工も、すべて団員自身によるもので、この本部施設の完成によって、消防活動の質と団員の意識がさらに高まることが期待されます。

ここを拠点に消防団は、乾季中は消火活動にあたり、また村々を巡回して森林火災を起こさない焼畑の仕方を指導します。密漁/猟者や不法金採掘人の保護区不法侵入を抑止するためのパトロールも重要な仕事です。また今後は彼ら自身の発案により、経済的に自立していく仕組みづくりにも着手します。これは雨季の消防活動閑散期にアマゾン原産の樹木の苗木を栽培して植林事業を行う近隣の行政機関に販売したり、種子オイルが自然派化粧品の原料として珍重される樹種の木を本部の周りに植林して種子を販売するという計画です。

どんな事業においても共通して言えることですが、成功（＝目的の達成）のカギは、先住民自身の主体性を引き出し、力づけて、彼らの自発的な取り組みを支えていくことにあります。消防団事業では、団の指揮・運営は団員のリーダー3名が責任をもって担い、当団体の事業パートナーであるマトグロソ州消防のマリアーノ中佐が消防技術顧問として彼らのサポートにあたるという形をとってきました。「自分たちがくらす森を自分たち自身の力で守りたい」。リーダーがそう力強く語る言葉が、胸にとてもうれしくひびきました。



写真上から：消防団本部、建設中！ / 気温40度以上の炎天下でも消防団員たちは皆、本部ができる喜びいっぱい働いていました / 朝ミーティングを行うリーダーのホイチ。責任感あふれる頼もしい青年です / 保護区境界線まで迫る大規模農業開発 / 昨年実施した消防技術講習会の修了書を作って皆に手渡して来ました

アマゾンの森を守るために頑張る若者たちを、これからも応援よろしくお願いたします！